

きっかけ

2025.7.9

教員には、研修をする機会がある。また、研修をしなければならない。これは、企業の方でも同様であろう。今まで何度も研修を受けてきた。途中からは、研修を行う立場となった。思うところがある。研修とはいうが、果たして、どのくらい役に立っているのだろうか。それは、参加する人によって違う。すなわち、どのような心持ちで研修に参加するのか。どのような姿勢で研修に臨むのか。それによって、だいぶ変わってくる。

研修中、あるいは研修が終わった直後は、ああよかったです、役に立ったと思うことが多い。ところが、時が経つと、研修内容がどこかにいってしまっていることがある。そんなに多くはないのだが、鉄は熱いうちに打ての如く、研修後、すぐにアクションを起こすことがある。それだけ、その研修内容が自分に合っていたということだろう。あるいは、講師など研修担当者に、よほどの魅力があったということなのかもしれない。突き動かされる感覚である。

研修はあったほうがよいに越したことではない。だが、研修よりも実になることがある。それは、自分から動いたときである。本を買って勉強する。人の話を聞く。身銭を切って研修会に参加する。自主的、自発的、主体的に行動したケースである。

用意された研修だと、基本的に受け身である。参加しなければならないというスタンスになる。そうなると、さほど効果が上がらないような気がする。なぜだろうか。主体性の問題なのだろうか。半ばやらされている状況がよくないのだろうか。そうであるならば、小学生、中学生の授業も同じであろう。納得せざるを得ないところがある。

それでも、研修はきっかけにはなっている。何事も、きっかけは大事である。きっかけがないと何も始まらない。研修に多くの期待するほうがよくないのかもしれない。最初から、研修はきっかけにすぎない、きっかけにしかならないと割り切っていればいいのかもしれない。

研修を行うほうの立場になって、研修を受ける側から物事を考えるようになった。相手意識である。いかにしたら、きっかけを上回る、きっかけのレベルを超えるものにできるか、そんなことを考えている。研修者の心に火をつけたい。火がつけば、人は動く。自分から動けば動くほど、身になっていく。それこそが、真の意味での研修である。

そう考えると、研修とはきっかけであり、火をつけるための貴重な場だと言える。何事も自分からという姿勢、主体的に動く気持ち、つき動かれるものが大事である。研修により、きっかけをつかみ、動き出す先生方が増えていくことを望まずにはいられない。